

年の神弥生遺跡

— 支石墓・甕棺・住居址について —

田 添 夏 喜

一、遺跡の発見と調査にいたる経過

年の神遺跡の付近は笹やすきが生茂り、道幅もせまいので夜ともなれば誰一人通る人としてないありさまであった。今時の戦争前後から、道路の拡張や段畑の造成等の土木工事が行われ、その度ごとに弥生時代以降の貝層、獣骨、土器、石器などが数多く発見されるようになった。凹道の側壁には全長一・八mもある大型の合口甕棺が縦半分に切られたまま残されていた。

年の神の森には四トンもあるうかと思われる平たい巨岩が三mほどの間隔をおいて東西に二個並んで露出していて、西側の岩上に年の神の石祠が鎮座している。この二つの巨岩が注目され始めたのは昭和二十七年頃である。当時福岡県糸島郡の石ヶ崎の支石墓についての報告や、佐賀県の葉山尻支石墓の発掘調査が行われており、日本に於ける支石墓の研究が学界の注目を集めていた。この風潮にのって、今は故人となられた江崎忠蔵、杉森義徳、瀬戸武市氏などを中

心とする荒尾史跡研究会の一行や坂本経義先生などがこの年の神を数度にわたって踏査され、これが支石墓であろうという意見を出された。昭和二十八年八月、当時熊本県立玉名高等学校教諭の職にあった田辺哲夫氏は同校考古学部員三十余名を率いて一週間の日程で発掘調査を実施された。その際筆者も参加したが、調査の焦点となつたのは二巨石を支石墓の礎石と見なし良いかどうかであった。発掘の結果、二巨石は明らかに原位置から動いていたが、東側の巨石のすぐ北側に土板が発見され、この上に巨石がかぶっていたと考えても不都合がないことや付近から多数の甕棺の破片が出土したことなどから、この巨石を支石墓の礎石であろうと考えた。又は、巨石より約五〇m南にある貝塚も発掘し、これが支石墓とほぼ同時代のものであることを明らかにした。

今回の調査の発端は昭和四十二年春に始まる畑地水田化のための開田工事である。四十二年の試作に成功したことに力を得た農民三十余名が岱明町野口早馬開田事業組合を結成し、この地に事務所を置く土木請負業田上組施行のもとに四十三年初頭より工事に着手し

同年六月には第一期工事を終った。開田が行なわれた地域は岱明町野口早馬、平、西平等で総面積およそ八百五十アールである。この広大な面積の全面の表土が削り均され、または盛り立てられていった。そのためいたるところで遺物包含層が露出した。整地後、早速水田耕作に移行するため配水管を敷設する溝が各地毎に掘開された。これらはこの地域に今だかつてなかった大工事であったため、今まで知られていなかった地点でも多くの遺構や遺物が露出した。ブルドーザーのあい間を縫うようにして間断なく現場を見廻り土地所有者や工事者との接触を密にして調査の実効を挙げることに努力した。

調査には筆者と県立玉名高等学校考古学部（顧問鶴上寛治・高木瑞穂）員があたり、地元の研究者荒木純治氏は家業のかたわら連日工事現場を見廻り、作業の進捗や遺構・遺物の露出状態などの報知の任にあたられた。調査に関する庶務一切は岱明町教育委員会教育長齊藤元氏、同係長吉田和馬氏、同主事松浦芳東氏等をお願いした。断続して長期間に亘ったため、全員休日も返上して総力を上げて調査した。ここに一応の調査報告が出来るのはひとえにこうした各方面の努力が結集されたからに外ならない。

二、遺跡の位置と周辺の遺跡

国鉄鹿兒島本線を玉名駅より西へ二・五km、次の大野下駅との中間にある鉄道線路の踏切りを渡り南に五〇mほど行くと、凹道の東側に「年の神」と称する石祠が祭られたこんもり茂る小さな森がある。この聖域を中心にして東へ約四〇〇m、西へ約一〇〇m、南北

幅八〇mに亘る細長い台地が「年の神遺跡」（第1図⑥）である。この台地は玉名地方の分水嶺をなす標高五〇一mの小代山の南裾が南方になだれ有明海に達するおよそ七kmの間にいくつかの段丘を形成しているが、その低位段丘の一つである。標高は約一mで現在の海岸線より北に約四kmほどはいつている。

玉名駅の西を南流する境川と大野下駅の西を南流する行末川とに挟まれた約一五〇kmに及ぶ台地の到るところに縄文前期以降各時代の遺跡が分布している。年の神遺跡はそのほぼ中央に位置している。以下この台地上の遺跡を弥生時代を中心に眺めてみよう。

東部

平坦な台地の東端が漸次せまくなって半島状を呈して絶壁となり、またはなだれて湿田となる。台地と湿田との境界線の一角に阿高式土器等を出土する縄文中期以降の貝塚が営まれている。地名に因んで峯崎貝塚（第1図①）と呼ばれているが、この地域を中心に昭和三〇年頃より玉名商業高等学校の校舎建設計画が進められ、その敷地造成工事によってこの峯崎貝塚が発見された。出土した土器は阿高式や御領式等の縄文式土器の外に弥生式土器もかなり出土している。貝はカキが主で少量のアサリ、ハマグリ、ニシなどがある。

その後の校舎増築、運動場拡張等の新規工事によっても縄文式土器や弥生式土器が出土したので、現在のはほとんど消滅し、わずかに痕跡を残すのみである。この貝塚より西へ数百メートル、大野牟田を見下ろす位置に塚原という小部落がある。この部落の中ほどに甕棺群を中心とする弥生時代の遺跡（第1図②）がある。終戦直後ごろ部落道の拡張工事に際して、大型合口式甕棺が数基出土した。県立玉名高等学校考古学部で調査が行われ、出土品の一部は同校へ、人

- ① 峯崎貝塚
- ② 塚原甕棺群
- ③ 塚原古墳
- ④ 塚原石蓋土墳
- ⑤ 中土遺跡
- ⑥ 中土須恵器出土地
- ⑦ 下野口石蓋土墳
- ⑧ 年の神遺跡
- ⑨ 中道貝塚
- ⑩ 古閑原貝塚
- ⑪ 高道城跡
- ⑫ 弁財天古墳
- ⑬ 東光寺古墳
- ⑭ 下前原遺跡
- ⑮ 大原遺跡
- ⑯ 院塚古墳



第1図 年の神周辺の遺跡

骨の一部は岱南中学校に保管されている。又、この部落の北側には弥生末期から古墳時代にかかると思われる箱式石棺（第1図③）や石蓋土墳（第1図④）が発見されている。

西部

年の神遺跡より西方へ、下野口・中土の部落を通って大野下駅の近くまで約2kmの間に、縄文後晩期（御領式土器等）の遺物が点々と見出されるが、その中に混って弥生終末期の土器や古墳時代の土師器、須恵器（第1図⑥）がかなり発見されている。特に中土部落周辺の遺跡（第1図⑤）は注目される。

南部

玉名と長洲を結ぶ県道筋にある岱明町野口大野小学校付近一帯には石蓋土墳群や弥生終末期の土器を包含する遺跡（第1図⑦）がある。県道を南に越えた山下部落には中道貝塚（第1図⑨）、古閑原貝塚（第1図⑩）等がある。中道貝塚は昭和二十七年八月に県立玉名高等学校考古学部によって調査され、縄文晩期の夜日式土器や弥生前期の遠賀川系の土器や石器や炭化米等が出土している。近くから石蓋土墳も発見された。古閑原貝塚は縄文中期の阿高式土器を中心とする貝塚であるが、炭化米の発見で話題をまいた。ここから南に約200m水田をへだてた対岸の台地上は戦国時代の高道城址（第1図⑪）である。この東南の一角から弥生後期の土器などが出土する。高道部落から浜田部落にいたる台地上には、昭和四〇年以降行われた柑橘園造成によって古墳時代の須恵器土師器が多数出土した。この付近には弁財天古墳（円墳・割石小口積み石室・舟形石棺（第1図⑫））や東光寺古墳（前方後円墳（第1図⑬））がある。

北部

年の神遺跡の北側、鹿兒島本線を踏切ってせまい帯状の水田を越えたと下前原部落がある。ここではどうも園造成作業によって弥生終末期の遺跡（下前原遺跡（第1図⑭））が発見された。昭和三年二月より四月にかけて筆者と田辺哲夫氏とが共同で発掘調査を行った。約70mの畑地の中に住居址が少なくとも五十戸は認められた。その内最も良く残っていた十二戸を調査したが、いずれも隅丸長方形の堅穴住居であった。この遺跡の東北約300mには大原遺跡（第1図⑮）がある。この遺跡の存在は終戦直後頃から道路工事等で遺物が出土することから知られていた。昭和四三年、農業構造改善事業によって、弥生後期の住居址や箱式石棺が発見され緊急調査を行った。前述の下前原遺跡と共に極めて注目すべき遺跡である。整理が終了しだい改めて報告したいと考えている。

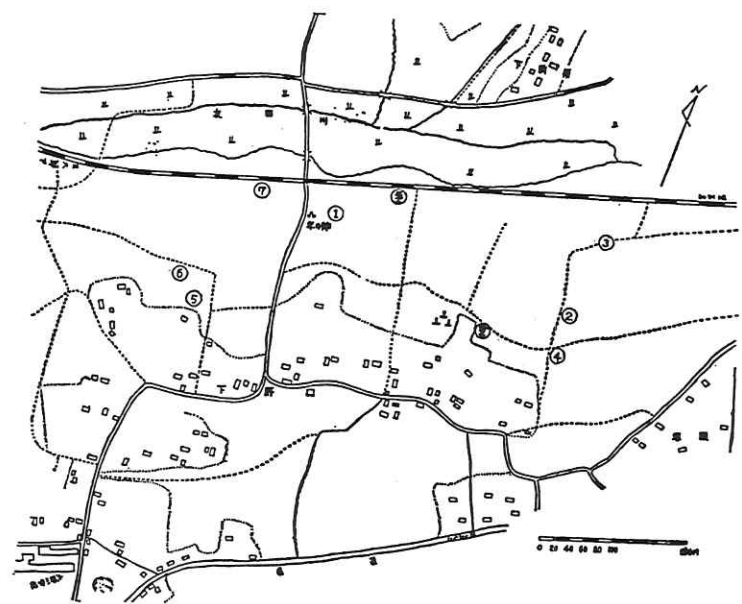
この遺跡の北西約1kmには著名な院塚古墳（前方後円墳・舟形石棺（第1図⑯））があったが、数年前工場建設で壊滅した。

三、発掘

発掘調査地の区分

年の神遺跡で遺物包含の最も濃厚な部分に第2図の様に第一地区から第七地区まで調査地区を設定した。この第一地区から第七地区は調査した順序である。

第一地区は年の神の石祠より東へ三〇mのところ、支石墓を中心とした甕棺群である。第二地区は第一地区より東へ三五〇mのところ、土器片の散乱と小型甕棺からなる約二〇mの範囲である。



第2図 年の神遺跡全図 ①～⑦は地区名

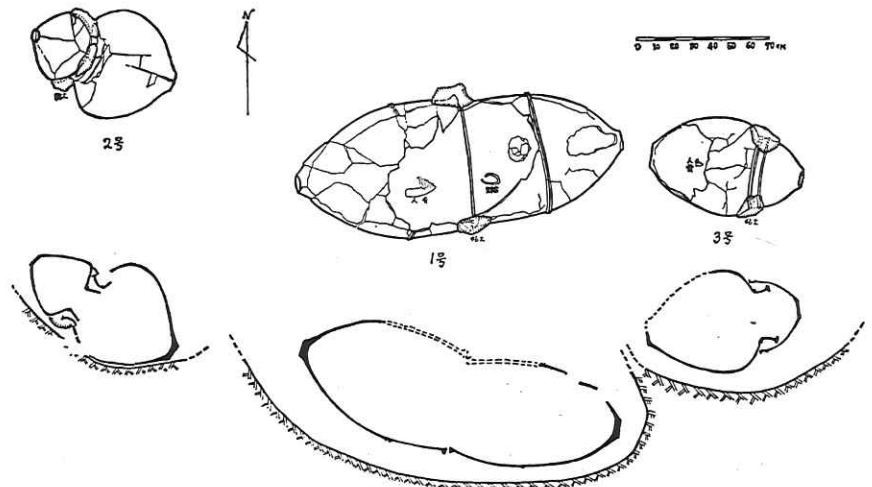
第三地区は第二地区から北に一〇〇mほど行った小径の付近で、合口式甕棺群である。第四地区は第二地区より南へ三〇mの所で、大型甕棺群である。第五地区は年の神の石祠より南西へ一五〇mの所で、貝層や土器片が出土した約二アールの畑地である。第六地区は第五地区の西北約三〇mで小型甕棺の出土地である。第七地区は第六地区より北へ二二〇mの所で貝層、住居跡、土器包含ビットなどが発見された地域である。字名では、第一地区から第四地区まで早馬第五地区と第六地区が平、第七地区が西平である。

第一地区

昭和四三年四月、年の神付近で大きな石と甕らしいものが見つかった。この町教育委員会の連絡で至急現地に赴いた。元田春夫氏等数名の地元関係者から事情を聞いた所、大石の下から出た甕の中より、近所の高校生が貝輪六個を掘り出したとのことであった。現地はすでに埋め戻され大石も別の所に埋め込まれていた。高校生から貝輪と甕の口縁部の破片を見せてもらった。もはや支石墓と甕棺であることは疑いない。再発掘して調査する必要があるため、県教育委員会や岱明町教育委員会と接渉し、調査することになった。これが今回の年の神遺跡調査の発端であった。

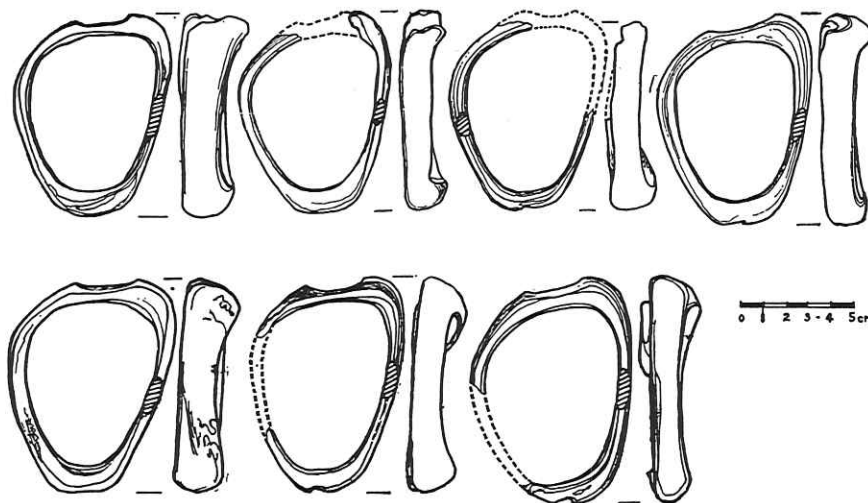
まず巨石の原位置を確かめるためフルトナーで表土を除いた所、四m四方の範囲で黒土混りの攪乱土が確認された。これが巨石の原位置に違いない。これを中心に縦五m、横五mの試掘溝を設定して掘り進んだ所、巨石直下の合口甕棺（貝輪出土）を中心にして東西に各々一個の小型甕棺を発見した。西側のを2号棺、東側のを3号棺とした。

1号棺——黒土混りの攪乱土から五五cm下に甕棺の上面があっ



第3図 年の神遺跡 第一地区実測図

た。この深さは工事以前の表土から一・三mの深さと思われる。甕棺の上面は合せ口（口縁部）を中心に縦八〇cm、横六〇cmの楕円状の破壊孔があった。これは前記の高校生が掘り出した際に穿ったものである。棺の大きさは全長一・七三mで、高さ八四cm口縁径七〇cmの甕（棺身）と高さ八九cm口縁径七三cm（棺蓋）とを組合せたものである。接合部を黄色粘土で封じ、棺蓋を西に向け十二度の傾斜で埋められていた。主軸線は東西より南に六度ふれている。土壟は長さ約二m、幅約八〇cmで棺形に沿う船底形である。棺内には朱と思われる赤色の顔料があり、右上腕骨の一部と思われる骨片や歯がわずかに残っていた。この骨片から考えて右下腕にあたるところに貝輪一個が発見された。棺底に付着していたので原位置から移動してはいないと思われる。先の高校生の話では貝輪はぎっしり並んで発見されたと言うことから、これはその時の取り残しであろう。従って貝輪は全部で七個あったことになる。貝輪（口絵4ページ・第4図）は巻貝を縦切りにしたもので稜角の突起はない。貝種はゴホウラ貝である。大きさは多少異っているが、最大のもので縦（内）のり）七・六cm、横（内）のり）六cm、最少のもので縦（内）のり）七cm、横（内）のり）五・四cmである。側縁は厚いもので一・七cm、薄いもので一・二cmである。



第4図 年の神遺跡 第一地区1号棺
出土貝輪実測図

軸線は東西より北一七度にふれている。2号棺の上端は1号棺の上端より約四〇cmほど高い。土壁は棺の下面に沿うように掘られている。

棺身(第16図3)は平底で球形に近い胴部をもち、くびれてやや外に開いた頸部へとつづく。胴部と頸部との境界には一本の凸帯がめぐる。口縁端部の内側は断面三角形に肥厚している。胴部最大径は五八cm、高さは六五cmで全体の形はずんぐりして見える。器面は粗いヘラ磨きである。棺蓋は(第16図3)は角張った胴部をもつ小形の壺で、胴部と頸部との境界に一本の凸帯がめぐる。口縁部は打ち欠かれており、棺身に差込んでまわりを黄色粘土で密閉してあった。壺の全面は磨き上げられ、胴部の上半に重弧半円細線文が刻まれている。胴部最大径は四〇cm、現在高は三七cmである。

土圧で多少つぶされてはいたが、内部には土はほとんど落込んでなく、朱と思われる赤色の顔料が見られた。人骨や副葬品等はなかった。

3号棺——1号棺の東側に接近して発見され、平面的には1号棺との最短距離はわずかに一五cmである。しかし、3号棺の土壁下面は1号棺の棺身の底部より約二〇cmほど高く、土層が上に行くにつれて識別が困難であったので1号棺との埋葬時期の前後関係を明確にすることはできなかった。棺身は壺形土器で、その上に鉢形土器をかぶせて棺蓋とし、接合部は白黄色粘土で密閉されていた。棺の頭部は東に向き、五度の傾斜で埋められていた。主軸線は東西より一度南にふれている。内部は空洞になっており、朱と思われる赤色の顔料と人骨の残片を認めたにすぎない。

棺身となっている壺形土器(第16図2)は高さ六八cm、胴部最大

径五三cmを計る。底部は平底で、卵形の胴部に直立した長さ約一〇cmの頸部をとりつけ、胴部と頸部との境界には一本の凸帯がめぐる。口縁部は厚手で断面T字形を呈する。器壁は粗いヘラ磨きである。棺蓋の鉢形土器(第16図2)は高さ二二cm、口縁部径四〇cmを計る。平底の底部からややふくらみをもって立ち上り、厚手の断面逆し字形の口縁部となる。口縁部のやや下に断面三角形の凸帯がめぐる。

第一地区

この地区では甕棺二基と土器や獣骨等が混在する石塊の配列遺構さらに粘土塊を入れたピットが発見された。甕棺は同型同大のものが二基、頭部を北にして約一五度の傾斜ではば平行して埋まっていた。ブルドーザーにかかって上半部を失っていたので二基が埋葬された時期の前後関係は不明である。

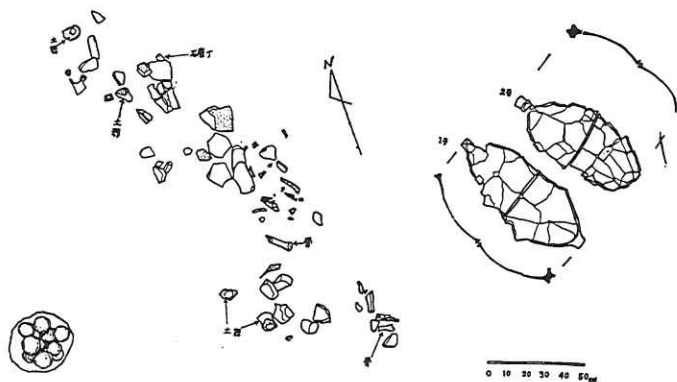
1号棺(第16図4)——棺身は中くぼみの厚い底部と厚手の口縁部をもった甕形土器で、高さ四一cm、口縁径三〇cmである。棺蓋も棺身とはほぼ同形で高さ三九cm、口縁径二八cmである。2号棺(第16図5)——棺身、棺蓋とも1号棺とはほぼ同じ器形である。棺身は底部を失っていて現存高は三一cm、口縁径三〇cmである。棺蓋は高さ三八cm、口縁径三三cmである。

塊石の配列遺構は甕棺の西側六〇cmの所にあり、長さ二・四m幅七〇cmでW字を横に引きのびたような形に安山岩の塊石を配してある。塊石の間には甕、壺、高坏などの弥生式土器片や石包丁などの石器さらに獣骨片などが発見された。

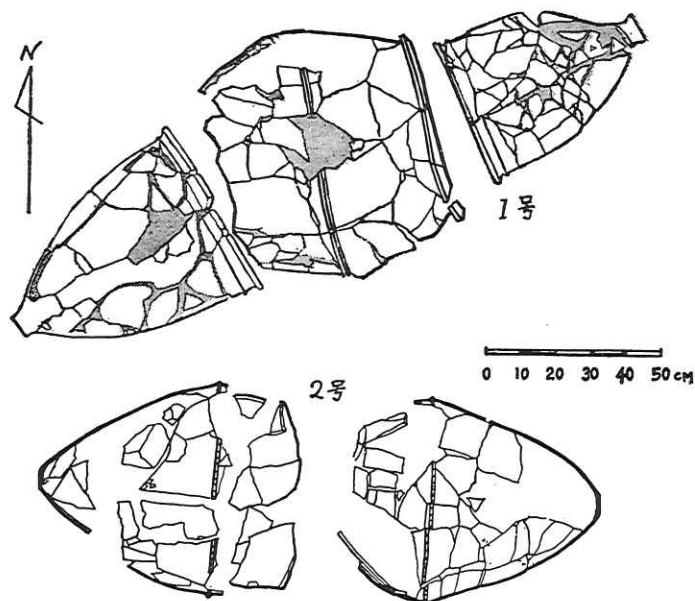
配石遺構の西側には径三〇cm、深さ四〇cmのピットが発見された。ピットの底には弥生式の甕形土器の破片を十数片敷き、その上

第三地区

第二地区の北を東西に通る農道に沿って掘られた水道管敷設のための溝の側壁に甕棺(1号棺)の一部が現れたことに始まる。ここを中心にして小径にかけて二四方のトレンチを設定して発掘を行った。1号棺の南二〇cmに別の甕棺(2号棺)の一部が現われたので



第5図 年の神遺跡 第二地区実測図



第6図 年の神遺跡 第三地区実測図

に粘土塊(手こぶしくらいの大きさに丸めたもの)を十数個積み重ねてあった。

これら三種の遺構の関係は、ブルドーザーで削平されていたため明らかにすることができなかった。この一帯からは前年度の調査で弥生式土器片、大型半磨製石鍬、石鏃などが発見されている。

トレンチを南側に拡張した。

1号棺(第16図11)——三つの甕をつぎ合せては水平に埋められていた。人骨や副葬品などは発見されなかった。棺蓋は中くぼみの底部をもち口縁下に断面三角形の凸帯がめぐる甕形土器である。高さ五五cm口縁径四五cmを計る。棺身は断面T字形で外側がやや垂れさがった口縁部をもち、ふくらんだ胴部に断面三角形の凸帯二本をめぐらす甕形土器(現存高六〇cm、口縁径五五cm)である。この甕形土器の底部をうち欠き、別の甕形土器をつぎ合せてある。最後の甕形土器は棺蓋とはほぼ同形であるが、口縁部はやや厚い。高さ六八cm口縁部径五四cmである。この三つの甕をつぎ合せた1号棺の全長は一九五cmである。

2号棺(第16図10)——口縁部を欠き取った甕形土器を二個合せたもので、全長一九九cmである。1号棺の南二〇cmの所に1号棺とはほぼ同じ深さで、頭部を東にして約二〇度の傾斜で埋葬されていた。主軸線は1号棺の主軸線より約三〇度ほどふれている。棺身と棺蓋との接合部には八cmほどの空隙を生じているが、これは土圧が何かで生じたものであろう。内部には副葬品や人骨など発見されなかった。

棺蓋は現存高六八cmの甕形土器で、卵形の胴部にやや丸味のある小さな底部がつき、胴部中央より少し上に列点文をつけた凸帯一本をめぐらしている。この凸帯付近の径が最も大きく、ここから急に小さくなって頸部につづくと思われるがこで欠き取られている。棺身は現存高七三cmの甕形土器で棺蓋よりやや細長い。胴部の最もふくれた部分に列点文をつけた凸帯をめぐらしている。胴部上端は欠き取られていて、頸部や口縁部の形態は不明である。

を使用し、口縁部を西に向け二八度の傾斜で埋葬されていた。主軸線はほぼ東西方向である。内部には副葬品や人骨などは認められなかった。

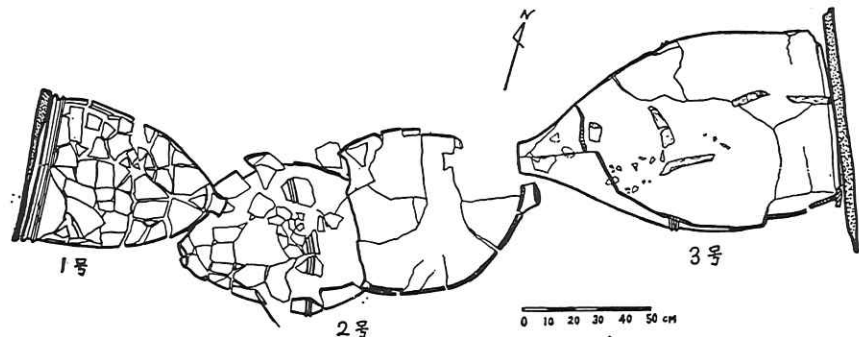
2号棺(第16図8)——甕形土器二個を合せた全長一四三cmの合口甕棺である。主軸線を東西より南に二八度ふり、頭部を西にして三四度の傾斜で埋葬されていた。棺蓋は1号棺、身棺は3号棺の埋葬によってその一部を破壊されていた。ひび割れがひどく人骨や副葬品は発見されなかった。

棺蓋は底部が平底で、大きく膨れた胴部の中央よりやや上に断面三角形の凸帯二本をめぐらす甕形土器である。凸帯の付近が最も大きく(径六五cm)、ここよりややすばまって口縁部となるが、欠き取られていて不明である。現存高は七〇cmである。棺身は棺蓋と同形で、現存高七四cm胴部最大径六五cmを計る。

3号棺(第16図9)——安山岩の板状石を蓋とした単棺で、頭部を東にして三十一度の傾斜で埋葬されていた。主軸線は東西より北に二八度ふれている。内部には人骨が数片残っていただけで副葬品はなかった。底部は平底で、胴部に向ってだいに大きくなり、中央よりやや上で最も大きくなる。胴部中央よりやや下に断面三角形の凸帯が二本めぐる。口縁部はやや厚手で断面T字形である。高さ一二五cm、口縁径七〇cmである。色調は赤褐色である。

第五地区

台地の南端にあたるおよそ一・五アールの畑地で、この畑より二段ほど下ると部落につづく。ここを約七〇cm程削って一段下った畑に盛り上げたので、いたるところで遺物包含層に達した。数ヶ所試掘したが包含層がほとんど削られ、遺跡の大半が破壊されていたので、



第7図 年の神遺跡 第四地区実測図

第四地区

配水管敷設の溝が掘開かれた際その南壁に甕棺の一部と石蓋が発見され、この地区調査の端緒を作った。この部分を中心に三四方のトレンチを設定して深さ三〇cmごとに平面に掘り下げたところ三基の甕棺が出土した。甕棺の名称は西より順に1号、2号、3号とした。甕棺の上面はいずれも今回の土木工事のブルドーザーで削られ、その上に新しい土が覆いかぶさっていた。

1号棺(第17図7)——中くぼみの底部とやや厚手の口縁部をもつ小形の甕形土器(高さ七五cm・口縁径五四cm)で口縁下三cmに断面三角形の凸帯をめぐらしている。蓋に安山岩の薄い板状石

全面的な発掘を思い止まり、遺物の採集と部分的な発掘を行った。

遺構——この地区の中央よりやや西北に寄った地点に約二m平方の貝層が確認された。貝種はカキが主で外にハマグリ、アサリなどがあつた。貝以外の遺物はほとんどなく、時期は不明である。この地区の北寄りに赤く焼けた土と焼石数個の配列があつた。付近に散乱した遺物などから住居址の一部と考えた。

遺物——打製石鏃七個(第8図5、11)石材は四個が黒曜石で三個が燧石質のものである。この中に茎をもつもの(第8図9)が一個あり注目される。第8図11は長さ八cmもあるもので石槍と考えた方がよからう。

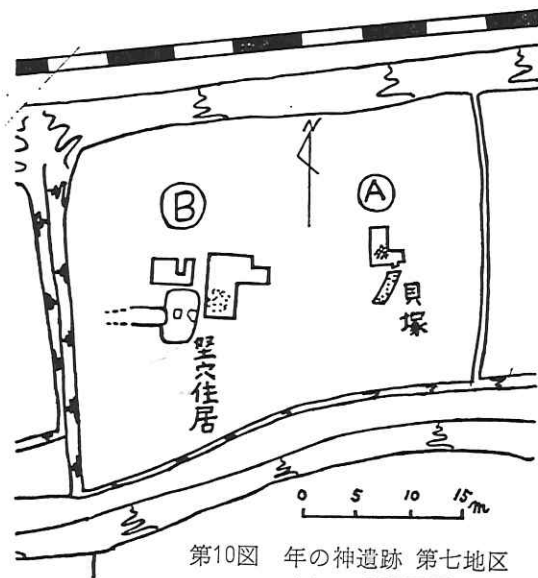
のみ型石器(第8図3、4)いずれも白っぽい粘板岩製のもので木工具として使用されたものであろう。第8図4はえぐり入り石斧の刃部であらう。

石鏃(第8図13)球形の石にみぞを一廻り掘ったもので、魚網のおもりとして使用したものであろう。この外に漁具と考えられる軽石片の中央に小孔を一つ穿った浮標が発見された。

以上の石器の外に撓型をした磨製石斧(第8図12)や剥片石器(第8図1・2)など多数に石器が発見された。土器は弥生中期、後期(壺・甕・鉢・杯・高坏など)のものや古墳時代から奈良時代頃までの須恵器(高坏など)・土師器が発見された。又、青磁(南宋・元)が数片見出された。

第六地区

十アールほどの畑の北西寄りに鉢形土器を棺蓋とした壺棺一個(第9図)を発見した。この地区の開田工事では浅いところで三〇cm深いところで五〇cmほど削平されていたので、壺棺が発見された

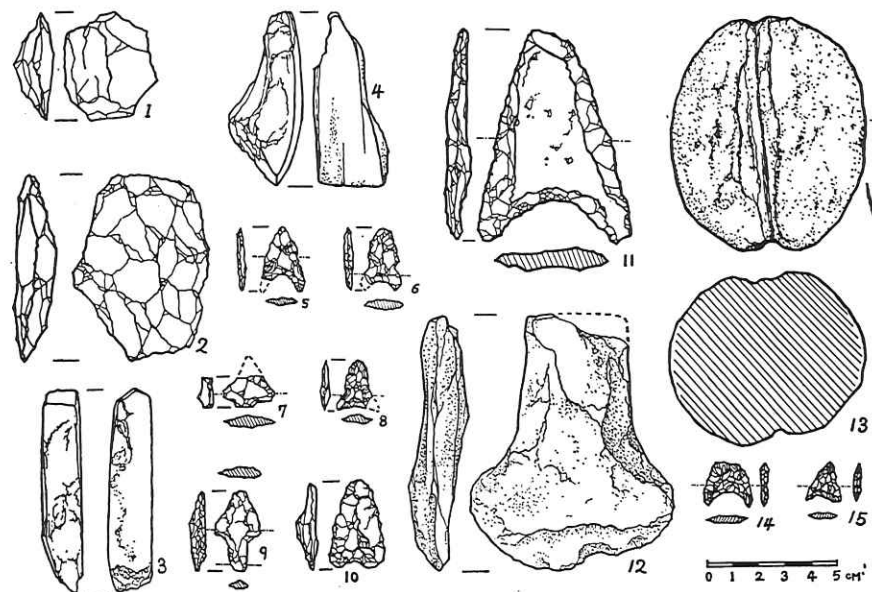


第10図 年の神遺跡 第七地区
トレンチ配置図

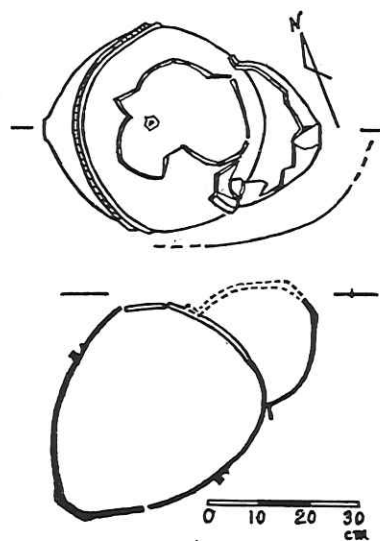
この地区で最も遺物が発見されたのは、鹿児島本線をまじかに見る台地北端の南北約三〇m、東西約四〇mの畑地である。表土が四〇〜五〇cmほど削られ、貝層や土器などが多量に露出していた。この畑の中央やや東よりに貝層が露出していたが、ここをA地点とした。

第七地区

底部は平底でふくらみながら立ち上って胴部となり、口縁部は「く」字形を呈する。胴部外面には粗いハケ目が施されている。色調は黄褐色である。



第8図 年の神遺跡 出土石器実測図
1~13 第五地区出土 14,15 第七地区 住居跡内出土



第9図 年の神遺跡
第六地区出土
壺蓋実測図

のは元の地表下四〇cmくらいであろう。付近に数個埋まっていることを予想して二m平方の発掘区を設定したが、外には何も発見できなかった。頭部を東側にして四五度の傾斜で埋葬されていた。主軸線は東西より南に二四度ふれている。胴部の下側には水ぬきかと思われる小穴を一つ穿っている。

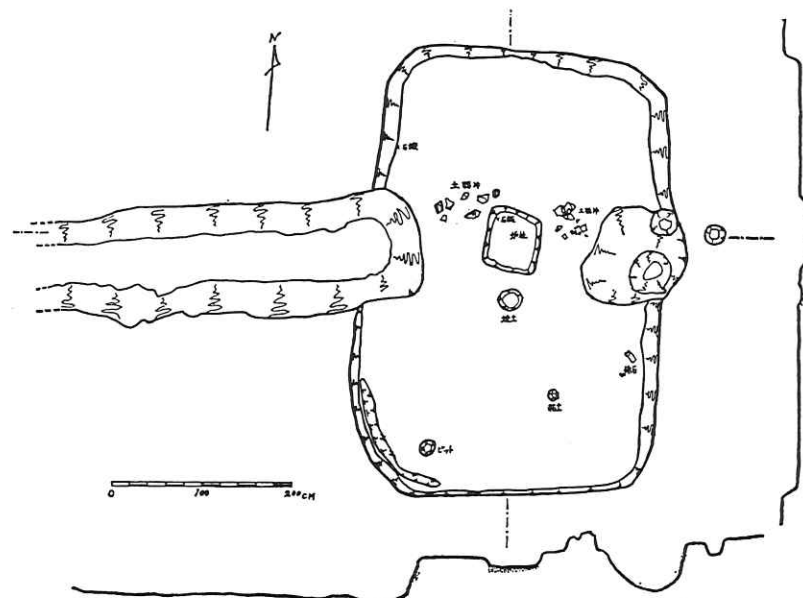
棺身は口縁部を欠き取られた甕形土器(第16図6)で現存高四七cm、胴部最大径四一cmである。底部は平底で、卵形の胴部の中央には断面三角形の凸帯と断面四角形の凸帯が各々一条づつめぐる。断面四角形の凸帯には赤貝のようなものの先を縦に押し当てて文様としている。口縁部は欠き取られているが棺蓋となっている鉢形土器の口縁に近い断面「く」字形のものである。器壁の内外面共に粗いハケ目が施されている。色調は黄褐色である。

棺蓋は高さ二二cm、口縁径二七cmの鉢形土器(第16図6)であ

中央部西よりの多量に土器が出土したところをB地点とした。

A地点——貝層を中心に長さ四m、幅二mのトレンチを設け平面に掘開していったところ、貝層は長さ一・二m、幅五〇cm(東北部)〜九〇cm(西南部)、深さ一八cm(東北部)〜一五cm(西南部)の小さく浅い土壌中に堆積したものであることがわかった。貝種はカキが主で、赤貝、ハマグリ、アサリなどである。貝以外の遺物は弥生中期土器の底部、胴部、口縁部などが少量出土した。この土坑の北三〇cmに小さな貝と土器片の堆積が発見された。これは径一・三m深さ一〇cmの円形の土坑内に堆積したもので、土器片は弥生中期の壺や胴の口縁部、胴部、底部などである。

B地点——ブルドーザーで削られたあとに土器片や腐植土が点々と見出された。その上面を少しづつ削って行くと、黄色粘土層中に切り込まれた南北に長い隅丸長方形(東辺四・四三m、西辺四・四八m、南辺二・九m、北辺二・六m)の竪穴住居が見出された。竪穴の深さは黄色粘土層の上面より一四〜一七cmである。床面の中央よりやや北によった部分に長方形(六〇cm×七〇cm)の炉が切っていた。深さは床面より七cmで、内部に灰と焼土がまっていた。炉の中より黒曜石製の石鏃(第8図14)が一個出土した。炉の南方二〇cmにも径二五cmの円形の焼土があった。東壁中央部には径一・二m、深さ五四cm(最深部)の円形の穴が発見された。この穴の底面にはかなり凹凸がある。これと同様な住居地内の穴は前述の下前原遺跡の住居跡でもかなり発見されている。菊水町の諏訪の原遺跡の住居跡では同様な穴にはほぼ完形の大きな甕形土器が埋まっていた。これらの点から、この穴は日常容器や食糧品の貯蔵庫としての用途が考えられる。柱穴は住居跡床面の西南隅に一つ(径二六cm、深さ



第11図年の神遺跡 第七地区 堅穴住居跡実測図

れた。中央部南寄りには手こぶしぐらいの白粘土の一塊が見られた。

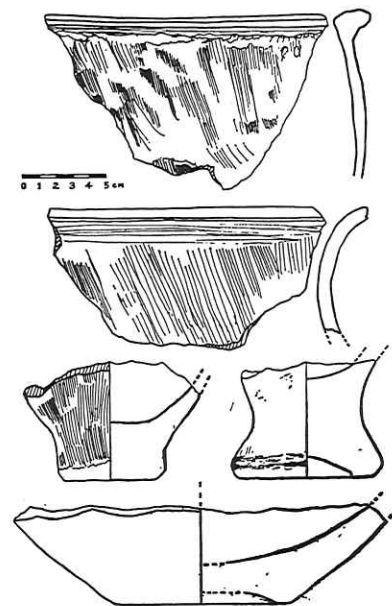
住居跡の北側には隅丸長方形の小さな堅穴状の凹み（九〇cm×一六cm、深さ三〇cm）が発見された。この凹みの中央よりやや北に寄った東西両壁に径二〇cmの柱穴が各々一個づつあった。又、凹みの西北四〇cmの所にも二個の柱穴が接して発見された。凹みの中の遺物は少数の土器片のみである。住居跡に関係した何らかの遺構であろう。

住居跡の東側に長さ一m、幅八〇cm、深さ七〇cm（最深部）の穴があり、その中に腐植土、弥生式土器、焼土などがはいっていた。

以上の様にこの第七地区は堅穴住居跡を中心とした日常生活の場であったと考えられる。住居跡内出土土器の特徴は第二地区出土の甕棺に近いので、住居跡の時期は年の神の甕棺群が埋葬された時期のものと考える。調査した畑の周辺にも遺物がかなり露出しており住居跡があることは予想されたが、田植えを目前にひかえての突貫工事が行われている中で、これ以上調査をつづけることが困難となり、やむなく調査を断念した。

その他の遺物

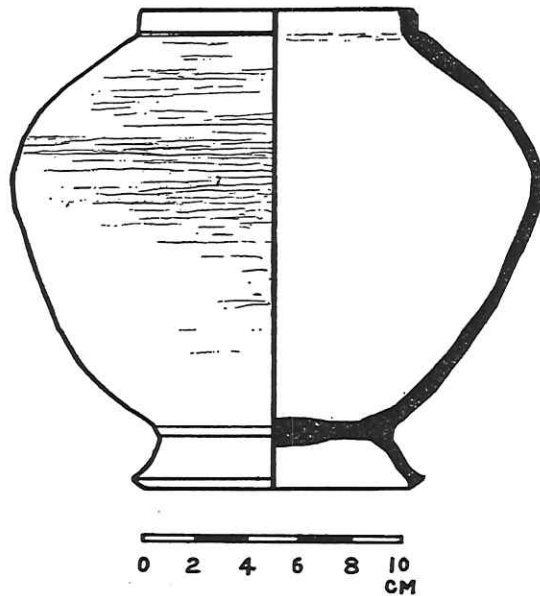
火葬骨壺（第13図）——第一地区と第四地区の間で、遺跡の南端を東西に通る小径の南わきの地表下六五cmから発見された。ブルドーザーにかかって大破しており、蓋にあたるものが見えたらなし。焼灰をうすく敷いた土壁の中に埋められ、内部には火葬骨片が壺の半分くらいまで入っていた。壺は薄灰色を呈する須恵器で、高さ一八・六cm、胴部最大径一九cm、底部には高さ二cmの高台を付した端正な形のものである。



実測図

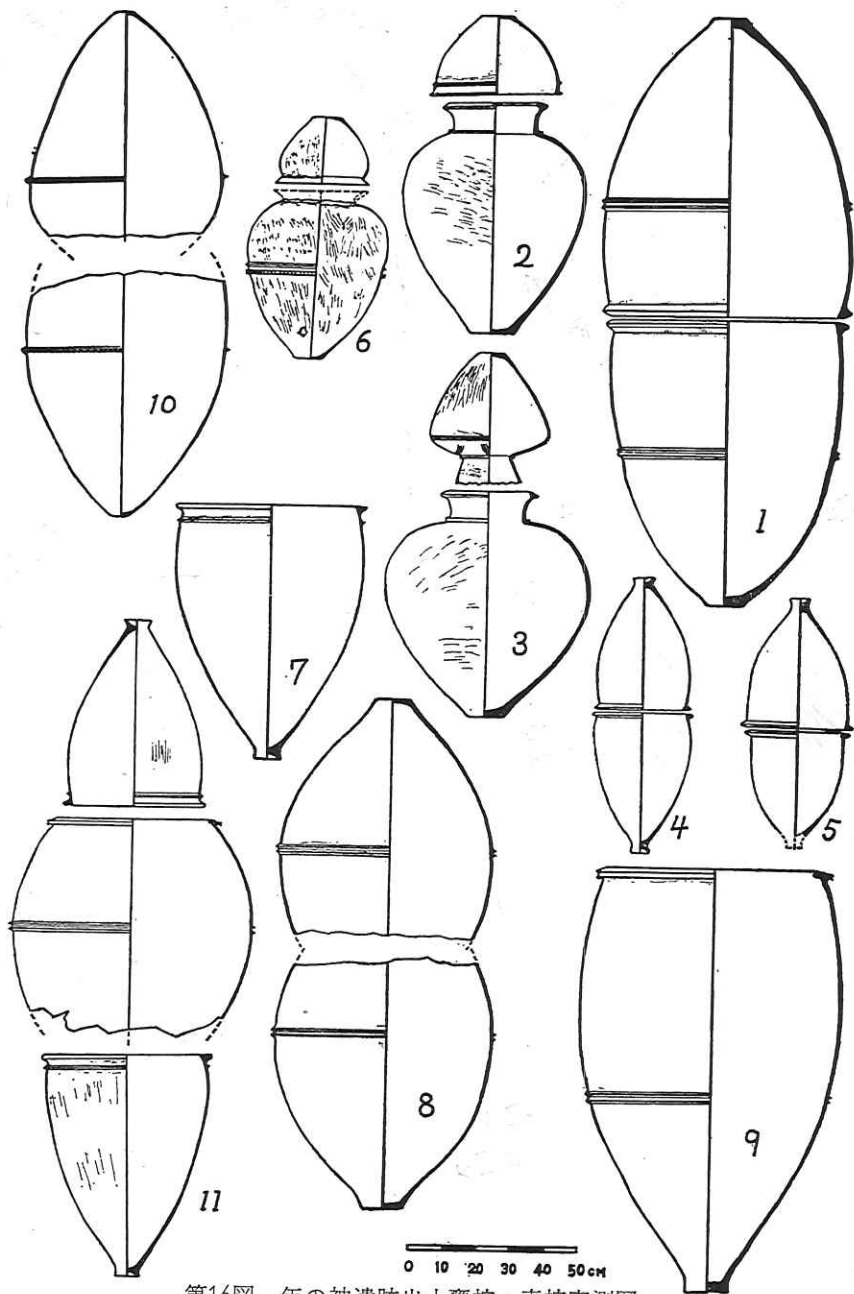
二五cm）と住居跡の東側に三個発見された。東側の柱穴の内二個は住居跡との間隔が遠いので別の遺構のものかもしれない。東側の柱穴の中で住居跡に最も近い位置にある柱穴の大きさは径二〇cm、深さ一七cmである。住居跡床面の西南隅に壁にそって浅い溝が発見された。これと同様な溝を下前原遺跡の住居跡でもいくつか発見している。西壁中央を切って西側にのびる長さ四・二m幅一・二mの溝は粘土質の表土を剥ぐ段階から現われたもので、後世に掘られた溝と考えられる。遺物は住居跡の北側に弥生中期土器片（第12図）が二ヶ所、北寄りの東壁に近いところで半欠の磨製石斧一個、西壁の北隅に近く黒曜石の石鏃一個（第8図15）、中央より南寄りで東壁に近く砥石一個、炉址内から黒曜石一個（第8図14）が発見された。

第12図 年の神遺跡 第七地区住居跡内出土土器

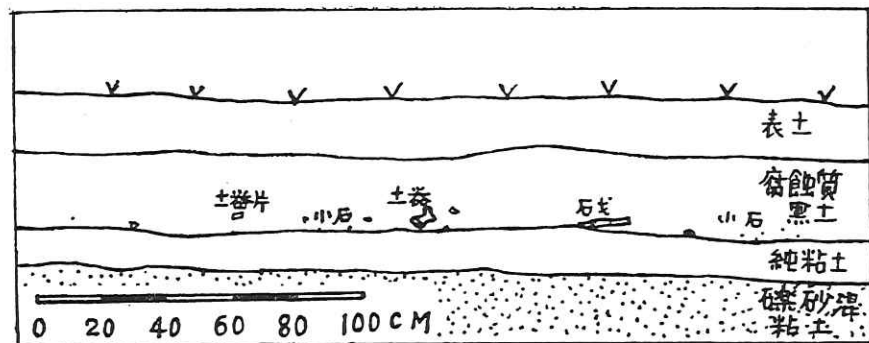


第13図 年の神遺跡 出土蔵骨器

石才（第15図2）——第一地区の北方およそ五〇mの地点で、台地の北限に当る。国鉄鹿児島本線にそって、約二mほど段下りとなった幅のせまい帯状の畑が東西にのびている。ここは昭和四二年の開田工事で水田となり、第一期の収穫を終えている。この一部が採土され、約七〇cm低くなり崖面を作っている。この崖面の現地表下三八cmの所に石戈が半分ほど露出していた。これと同じ層位に弥生式土器片や石片が数片はさまっていた（第14図）。石戈（第15図2）は粘板岩製で木目状の縞が美しい。現存長一四・五cm、最大部の幅六・七cm厚さ一・九cm、茎部長四・五、茎部幅四・二cmを計

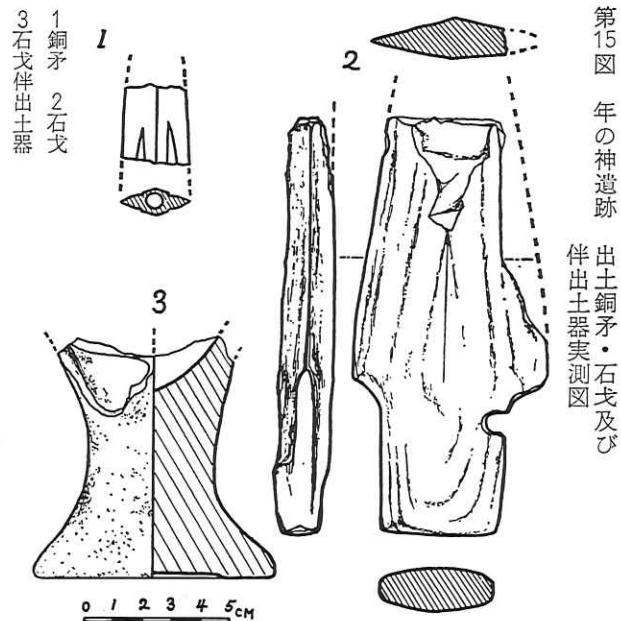


第16図 年の神遺跡出土甕・壺棺実測図
 1 第一地区1号棺 2 第一地区3号棺 3 第一地区2号棺 4 第二地区1号棺
 5 第二地区2号棺 6 第六地区 7 第四地区1号棺 8 第四地区2号棺
 9 第四地区3号棺 10 第三地区2号棺 11 第三地区1号棺



第14図 年の神遺跡 石戈出土状況断面実測図

る。身には鎬が通り、断面形は菱形である。茎部に向って身幅は漸次広くなり、鎬は弱まる。関はゆるいカーブをもって斜めに切られ、茎部となる。茎部の断面形はやや中ふくらみの長方形である。普通石戈の身の下部には二穴を穿っているが、この石戈には二穴がなく、それに代って茎部上端に丸い挟りがある。伴出した土器(第15図3)はやや上げ底になった厚手の底部で、熊本県内では宇土市の境目西原遺跡の貝層中から出土したものに類似している。この貝層中から出土した土器は弥生中期初頭と考えられている。



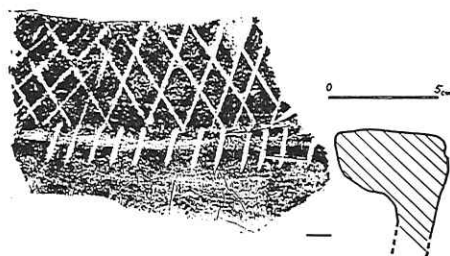
第15図 年の神遺跡 出土銅矛・石戈及び伴出土器実測図

銅矛(第15図1)——第一地区の東北約四〇mの畑中から採集されたものである。この付近は工事で最も深く削られ、かなり低くなっているで発掘調査を断念した。質の良い狭峰銅矛の身の一部(長さ二・七cm、幅二・三cm)で、中央に鎬が通り、断面形は長菱形を呈する。鎬の両側には樋が通る。樋は中ほどで浅くなり終わっているで刃先に近い部分の断片であろう。断面の中央には丸い穴があり粘土がつまっている。

四 結 び

年の神遺跡の中心をなすのは甕棺である。そこで中九州の弥生式土器の編年に従って年の神遺跡出土の甕棺を検討してみよう。

第一地区 甕棺の棺身は山鹿市笠山遺跡のものに近い形態を示しており、棺蓋となつてゐる甕形土器や鉢形土器とともに数少ない中九州の第Ⅱ様式の資料として注目される。貝輪を副葬していた1号棺は口縁部や底部の形態が第Ⅲ様式(須玖式)の甕棺とはかなり異つており、大牟田市の羽山台遺跡のⅡ式土器に類似した点が多い。2号棺や3号棺との埋葬時期の前後関係は必ずしも明確ではないが最も深く埋められていたので、2号棺や3号棺より新しいとは考えにくい。以上の点から1号棺も第Ⅱ様式に属すると考えたい。なお羽山台Ⅱ式土器(6号棺)に極めて類似した甕棺片(第17図)が採集されている。口縁部上面に施されている線刻の斜交文は特徴的である。この様な口縁部の斜交文は前述の倍明町北野口字塚原出土の甕棺にも見られるので、福岡県南部から熊本県北部にかけての特色かもしれない。



第17図 年の神遺跡採集甕棺口縁部実測図

第二地区 1号棺と2号棺は

口縁下に凸帯がなく現在のところ熊本県下ではあまり注意されていない。羽山台遺跡の第22号がこれに類似している。底部の特徴は黒髪式土器に近い。

第三地区 三つの甕を組合せた1号棺は柱身の一つと棺蓋が黒髪式で、須玖式に近い口縁部をもち胴部がはつたもう一つの甕は伊佐座式土器(高瀬三式)と呼ばれているものである。この様に黒髪式の甕と伊佐座式の甕を組合せたものに熊本市神水町の第七号甕棺がある。第四地区で黒髪式土器(1号棺)と須玖式土器(3号棺)に切られている甕棺(2号棺)を第三地区1号棺と同様に伊佐座式の甕棺に属すると考えてよければ伊佐座式土器は須玖式土器や黒髪式土器より古くなる。三つの甕を組合せた例には福岡県穂波町椋本・森原出土の甕棺があるが、この時期は弥生中期前半(城の越式土器)と考えられている。この様に見てくると中九州で須玖式、伊佐座式、黒髪式と呼ばれているものは用途の違いなどから器形や焼成などに違いが生じたもので、ほとんど同時期(弥生中期)のものである可能性が出てくる。佐賀県神埼郡の三津永田遺跡出土の甕棺に伊佐座式の甕棺と極めて類似したものがあることなどを考えると、中九州の甕棺は形式名の当否をも含めて再検討の必要があるように思われる。第三地区2号棺は胴部がやや細長い点は気になるが黒髪式の甕に属するものであろう。

第六地区の甕は内外面共に粗いハケ目が特徴的である。不知火町の出町遺跡出土の甕棺に類似しており、今回の年の神遺跡の調査で出土した甕棺では最も新しい特徴を示している。

以上の様に年の神遺跡では中九州のほとんどすべての形式の甕棺や壺棺が出土しており、その出土状態にはいくつか注目すべき点がある。

あった。副葬されていた貝輪や甕棺の周辺から出土した石戈・銅矛・住居跡などとともに中九州の弥生中期文化の研究上極めて貴重な資料を提供している。

註

- ① 原田大六「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」(『考古学雑誌』三八巻四号 昭和二十七年 東京)。
- ② 松尾植作「葉山速支石墓第二次調査概報」(『考古学雑誌』四〇巻二号 昭和二十九年 東京)。同「佐賀県下の支石墓」(佐賀県教育委員会 昭和三十一年 佐賀)。同「九州支石墓の研究」(松尾植作先生還暦記念事業会 昭和三十三年 佐賀)。
- ③ 田辺哲夫「年の神支石墓」(『日本談義』通巻一二二号 昭和二十八年 熊本)。
- ④ 有明海研究グループ「有明・不知火海域の第四系」(地学団体研究会 昭和四〇年 東京)。
- ⑤ 田辺哲夫「熊本県玉名郡大野村大字野口字塚原・塚原甕棺調査報告」(『玉名社会科研究会会報』第九号 昭和二十八年 玉名)。
- ⑥ 田辺哲夫「中道貝塚調査概要報告」(県立玉名高等学校考古学部 昭和二十七年 玉名)。
- ⑦ 坂本経典「古閑原貝塚調査概報」(熊本県教育委員会 昭和二十七年 熊本)。
- ⑧ 乙益重隆等「院塚古墳調査報告」(『熊本県文化財調査報告』第六集 昭和四〇年 熊本)。
- ⑨ 貝輪についての詳細な調査は九州大学医学部解剖学教室の

永井昌文教授にお願いした。貝輪の写真(口絵四P)は永井教授からいただいたものである。

- ⑩ 緒方勉「諏訪原遺跡発掘調査概報」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報―福岡熊本線・南関植木―』熊本県九州自動車道関係文化財調査団 昭和四十六年 熊本)。
- ⑪ 富樫卯三郎「境目西原遺跡―熊本県宇土市境目西原遺跡調査概報―」(宇土市教育委員会、昭和四十四年 宇土)。なおこの境目西原遺跡からも石戈が採集されている。富樫卯三郎「宇土市境目出土の石戈」(『熊本史学』第二・三合併号 昭和三十六年 熊本)。
- ⑫ 中九州の弥生式土器の編年で最も具体的な乙益重隆「黒髪式土器」(坂本経典「藤尾支石墓群」熊本県旭志村教育委員会 昭和三十四年 熊本)、乙益重隆「弥生式土器集成本編解説中九州地方」(小林行雄・杉原庄介「弥生式土器集成本編1」昭和三十九年 東京)によった。第Ⅱ様式、第Ⅲ様式、須玖式土器、伊佐座式(高瀬三式)土器、黒髪式土器などの名称はすべて前記の乙益論文に従った。
- ⑬ 乙益重隆「弥生式土器集成本編解説中九州地方」(小林行雄・杉原庄介「弥生式土器集成本編1」昭和三十九年 東京)。
- ⑭ 三島格、高島忠平、佐藤伸二、永井昌文「羽山台遺跡調査概報」(『九州考古学』三五 昭和四十三年 福岡)。
- ⑮ 田辺哲夫註⑤論文に同じ。
- ⑯ 平岡勝昭「熊本市神水町第七号甕棺調査報告」(『熊本史学』第二四号 昭和三十七年 熊本)。